フォト・ドキュメンタリー　「NIPPON」2005
選考会＆座談会レポート

Guardian Garden
PRODUCED BY RECRUIT

昨年に続き、２回目を迎えたフォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００５。去る３月２４日に募集が締め切られました。やや緊張した面もちで一年ぶりに選考員が集合しました。ここでは、選考後に行った座談会の模様をレポートします。

■日時　２００５年３月２９日（火）

■会場　リクルートＧ７ビル　Ｂ１会議室

■審査員　５０音順・敬称略
小林キユウ（写真家）
土田ヒロミ（写真家）
鳥原学（写真研究者）
元田敬三（写真家）
大迫修三（ガーディアン・ガーデン　ディレクター）
司会：菅沼比呂志（ガーディアン・ガーデン）

●シャボン玉で事件現場を表現
井上志保「少年Aの風景」

司会：今日は長時間に渡りお疲れさまでした。今回決まった5つの出品作品について感想や見所などを伺っていきたいと思います。まずは、少年事件の事件跡を追った井上志保さんの作品について。

小林：僕も『箱庭センチメンタル』を撮った時に、ここに取材に行って3日くらいこの辺りを歩いたことがあります。僕が行った時の気分、方法論とあまりに違っていて面白いと思いました。普通は、事件に対するジャーナリスティックな視点というか、そういう心情から逃れられないと思う。そこから逃れられて、事件現場でシャボン玉という、その発想がすごい新たなアプローチ。僕の想像をすごく良い意味で裏切ってくれたと思うんです。

鳥原：事件から8年くらいたちますか、去年でしたっけ。あの少年が（医療少年院を）退院というか。そういうことで撮ったのかな。シャボン玉という子供の遊びを使っていますが、子供の事件だからなのか、何なのか……。いろいろと想像をかきたてられて、いろんな解釈ができる。

元田：先入観なく作っているのか……、だから全然わからない感覚。僕がもし撮りに行ったら、ストレートに撮ってしまう。僕には想像できない写真で、未知との遭遇です。

鳥原：ただ、一枚一枚の写真に少年の犯行声明文の一部がキャプションとしてつけてあり、他に場所の説明が一行あって、写真の中にはシャボン玉が登場する。その3つの要素のうるささを、どういう風に今度の展示の中で消化するか。

小林：それが課題ですね。

土田：事件そのものが時間がたって、今は日常しか残っていない。そういう風景の中からもう一度記憶を呼びさますには、単なる現場の写真ではどうしようもないだろうと思います。そういう意味で、現在の私との関わりを示すものとしてシャボン玉をとばすのはわかる。もう一つは、デジタルで作られた軽い色とシャボン玉の色が、事件の特殊性を軽くしている。そうした軽いタッチでやることで、むしろ非現実的な特異性を出すという効果を出している。あとは、テキストを使っているということ。文学的な意味では、年齢を考えると少年の文章力はすごい。写真とテキストとは具体的には一致してないですが、むしろ過激なテキストが、現在の日常の中から掘り起こすという意味では有効だったと思いますね。

大迫：こういう、前日どこを歩いたとか、少年の書いたテキストは、自分で調べようと思ったらできるんですか?

小林：そうですね、ある程度はわかっています。頑張れば調べられますね。

鳥原：もともと少年の文章は何かの引用文ですよね。ダンテの神曲とかコミックからとか。そういう意味では、メタフィジカル、メタフィクションとして何重にも重なる……、という構造がこの写真にあるかもしれない。本人が意識しているかどうかわからないけど。

小林：少年が住んでいた家は、普通に行ってポッとみつかるものではないんです。僕はタクシーの運転手10人くらいに聞いてやっと 1人わかったくらい。かなり根性入れないとこの場所にたどり着けない。タンク山自体、マスコミでは有名ですけど、地元の人も結構知らないし。そこをちゃんと行っていたところなんか、すごいなって思います。

鳥原：いろんな事件跡を撮るのは小林さんも含めて、藤原新也さんとかいろんな人がやっている。この作者は23歳。だから、ちょうど同じ歳くらいの子が起こした事件。それを自分が社会人になり、写真という表現方法を持った時に、それを撮ろうと思ったのはいいですよね。

大迫：事件そのものをジャーナリスティックに追っかけるというのはあるけど、彼の実際に歩いた足跡とか道をそのまま追っかけて、そのまま写真を撮るというのが、ありそうで、ない。緻密に準備して、よく調べているなと思います。

司会：撮影もさることながら、発表するのはとてもナーバスな写真だと思います。彼女の言いたいことを誤解のないよう、伝えていかねばならないと思います。

●マンション群がつくる都市周縁の風景
船戸太郎「Far East the Residence」

土田：この写真は、すでに表現として典型がみられる作品ではあります。だからといって完全に過ぎ去ったものではなくて、都市周縁に住まうという時代状況を表現していて、しかも完成度が高い。きちっと丁寧に積み重ねています。たしかに都市の問題を指摘するようなドキュメンタリーという意識はそんなにない人かもしれません。空間性みたいなものを読む能力の高い人で、そういう意味での視線の確かさ、フレーミングの確

かさ、造形力は持っている。絵づくりに対して十分な快楽を楽しんでいる感じがあって、作る側の一人として僕は同感できる。

元田：ちょっとでもブレてる写真がないので、完璧にやることやってて渋いなあと。同じことを続けていくことの魅力みたいなものは感じます。

鳥原：完成度が高いのはいいんだけど、それは写真のための写真。そうなると動機的に不純になるんじゃないかと、ドキュメンタリーという被写体の問題を考える作業のなかではそれが気になる。いいところは、最初見た時にやっぱり強さがある。きちっとできていて、計算してやるだけのことはやっている。時代の典型として郊外型巨大マンションの最後の時期……、かどうかわからないけれどもそういう風に捉えれば、何か見えてくる。

小林：完成度は確かに高いと思うんですけれども。何か、複写しただけというか、撮り手が何を言いたかったのか、何を伝えたいかが、さらに前面に出てくるといいと思います。

土田：この場合、応募作品はもう少し大きいサイズで出すべきだね。あれだけのディテールが写っているんですから。

鳥原：どこに注意を払って写真を作っているのか、というのが知りたいですね。アンセル・アダムスを好きな人とか完成度の高いところを目指す人たちもいますし、そういう趣向とどこかかぶるのかな。

大迫：単純にあの建物ひとつひとつの面白さ、ここにこんな建物があったのかっていう面白さがありますよね。ほんとに複写なんだけど、その複写のしつこさというか、プロの複写マンが1個のガラスコップをすごくこだわって撮っているような感じ。それがエネルギーになっているんだと思います。それが完成度っていう言葉になって、そのこだわりの記録魔的なところが面白い。それと、モノクロで、シンプルな造形だけが際立つ撮り方にしたのが良かったと思います。

●サブカルチャーの世代
滝沢友彦「THE WINK GAME」

元田：僕はこの作品は映像的にもすごく目に飛び込んでくるのが好きですね。被写体を見つけて撮っているというより、自分の周りの仲間とかいつも遊んでいるところを撮っている。自分の生活がたぶん面白いんでしょうね。楽しめてるから、すごくライブ感があっていいと思いました。

小林：今回の出品者の中で、一番人柄が出ている。会ったことないけど、結構気のいい兄ちゃんみたいな感じが伝わってくる。すごく体温のある写真。素直にいいなと思います。

土田：現在はサブカルチャーの時代といえますが、彼はサブカルチャーの周辺にいて、サブカルチャーの世代や場を撮っていますね。サブカルチャーの中にどっぷりひたりながら、表現として立ち上がってくるのも面白い。この人は精神的に強い暴力性をもった、強いアタックができる人だと思います。自分の形式やスタイルが固まるとそれに依存して新しい展開ができない危険性をもっているように見えますね。

鳥原：この写真はリアリティがすごくありますよね。小さいサークルの中を追っているのに、そこの人たちだけ共有できるリアリティだけでなく、その外側にいる私たちにもちゃんと届いているのがいい。結構仲間うちの写真を撮っている人はたくさんいます。いまいちサークルの外の人にわからないというのが多かった。彼はどういうわけか、写真の文法みたいなものを持っている。それがその暴力性的なものから出てきてるなら、面白いことがあと何年かできると思いました。

大迫：このフォト・ドキュメンタリー「NIPPON」という公募展は、コンセプトが重視されます。正直言って、今回の中では一番、そういった意味では違うのではないかと思っていました。ところが、写真があまりに強い。それを言わせない結果論がついてきている。ただ自分の周辺や友達を撮っているだけかなと思いがちなのですが。

司会：選考を始める前に、みなさんと選考基準というか、方向性を確認し合いました。この公募展では、漠然と“ 自分の日常 ”をテーマに撮っているものは避けたかったのですが、この写真は、他者に向かっているか、自分に向かっているかという意味ではどちらでしょう?

土田：ダイレクトに他者に向かっていると思います。ストレートにね。

大迫：他の出品者は、コンセプトや撮り方を決めて一回頭で考えている。彼は頭で考えていない分、ストレートで、その分強さはあるんだけど、ドキュメントという思考性は感じなかったんです。写真として強いのですが……。

鳥原：応募作品の構成もよくできていましたし、見せることの社会性を意識している。コンセプトも明確である。撮影時点でこう見せたらもっと面白いだろうとか、伝わるだろうというのはそれなりに考えている。浅いか深いかという問題はあるけれども。撮影スタイルと撮影の能力と、見せるスタンスというのがうまくそろっていると思います。

●同胞と向き合う
崔殷植「向き合う―川崎朝鮮初中級学校の記録」

司会：日本の朝鮮学校の中に入って子供達や学校を撮った作品です。

元田：応募用紙を読むと、韓国からの留学生で、日本に来て、朝鮮学校があることを初めて知ったと書いてありました。そこで気付いたこととか、学校のみんなと話して気付いたこととかあったんだろうけど、そういう部分がもっと出てくれば良かったと思いました。6×6でうまく出来てて、悪く言えば、お手本どおりの写真。自分がそこに行って、何を感じたかというのも、なんらかの方法で出せればいいと思った。

小林：僕は、まあ普通の写真だという感想ですね。オーソドックスというか。

鳥原：朝鮮学校ってすべて北朝鮮のことでしょうか?　韓国の人が、日本で北朝鮮の学校があることを知った、そういういうことでしょうね。

元田：韓国人がみた、在日朝鮮人の学校。たぶんそこで、同じ言葉で話すけど、ぜんぜん文化が違ってててズレを感じたんだろうと思います。展示でもそういうのが出ると面白いと思う。

大迫：「向き合う」っていうタイトルからして、なんか距離があったんだろうと思いますね。以前在日コリアンの子が、自分の母校の朝鮮学校を撮りにいった作品がありましたが、それとは全然意味が違います。

土田：この「向き合う」は、彼が自分自身の文化に向き合っている。異国へ来て同胞が同胞に向かい合っている。そういう二重の構造が表現されている。そこがこの写真の面白いところですね。日本に来て、日本の中で閉じられた場所にいる同胞の姿を見てある種のショックだったと言うんですから。十分であるとは言えませんが、視線の強さや、日本に来て初めて自分の民族を自覚する彼の姿勢を買いたい。

大迫：みなさんは日韓併合のことをどう意識しているんでしょう?　どのくらいの世代まで具体的なイメージを持っているんでしょうか。20代、30代の人は歴史的事実として認識を持っているんでしょうか?

土田：正直言って僕らが小中学校の時は、残念なことに差別がありましたね。彼等が闇の世界を生き抜いてきた、という意識がある。でも、僕らとそう変わらない世代の女性が、韓流とかでヨン様を追っかけてたり……日本が変わったようですね。

鳥原：関西は地域によってそういうのがありました。

元田：ありましたね。普通に朝鮮学校に行っている友達がいました。ただ、そこの女の子の家に僕が電話するとお父さんとお母さんに怒られるから電話しないでと言われたりとか、そういう感じでした。

土田：ここへきて急に日本人の差別意識がなくなってきました。それは世代的なことだけでなく、経済力も同格な力を持ってきた、ということもあるんじゃないでしょうか。

鳥原：民主化されてきたのが大きいのでしょう。この話になると、戦後の日本人は何をしてきたのか、という問題に必ずつきあたります。この作品を選んだことの副産物としても必ずついてくる。今回の彼にしてみれば、そういう状況を知らずに来日した。日本で朝鮮学校があって、在日コリアンの人たちがお金を出しあって学校を作って教育をしてきている。そのことを彼は知らなくて、私たちは「え、知らなかったの?」って今日驚いているわけです。知らないことを写真によって知っていって、その驚きがちゃんと出ていることが大切だとすれば、いいドキュメンタリーだと思います。

元田：それを日本でやるっていうのも面白いですよね。

●距離感のある広島
三田村陽「対岸」

鳥原：広島という問題もまた、日本人としてずっと抱えて行かなくてはならない問題。時間がたつにつれて、そのスタンスが微妙に変化しています。この作品は、今の時代に、対岸から広島を見ることで、日本人の受けとめ方とか、戦争に対するセンシティブなものを描こうとしてしている。それは、30代とか20代の人たちの、正直な感覚。街は普通に平和な時間が流れていくけど、過去に対してどういうふうに向き合っていくのか。そういうことの微妙な問題も含んでいて面白い。

元田：僕も毎年8月6日に広島に行ってしまうんです。全然作品として発表する気もないし、特に関わりもないんです。でもなんか広島という響きだけで気になる場所。この写真を見たときに、なんかヒヨワだなと思った。あくびしている写真とかあったけど、なぜそれを選んだのかというところが物足りない。行く理由は何でもいいけど、撮ってセレクトして、発表するときになんかひとつ欲しい……なんか受け取りたいけど、彼と共有できるところがないからわからないんです。

小林：僕は、逆にさめた間延びしたところが良かった。はじめ応募用紙を読む前は、広島とは思わなくて、その辺の地方の街を撮った写真なのかな、と思った。広島だからっていう気負いがないっていうか、広島を普通に、本当に対岸というか、遠くから眺めるアプローチ、知らないことは知らないし、知っていることは知っているという距離感の潔さが感じられて、好感のもてる作品でした。

土田：僕自身まだ広島を撮っているんですけど、この写真と方法論的に似ていると思いました。今広島を表現しようとしたときに、広島それ自身がもう記憶も通り越して歴史になって見えなくなっている。対岸、彼岸になってしまっている。その事実を三田村さんは表現している。彼自身の意識の中で、「やらなくてはいけない……、でもそんなものやれるわけないじゃないか」という正直な意識みたいなものが写ってきています。彼は、わりとしたたかに広島の記号的なもの、原爆ドームとかを、日常の風景の後ろの方にチラチラッとはめ込んで、かなり意識的な作業をしていますね。よく分からないのですが、タテ位置に妙にこだわっているようだが、この方法はこの作品に広がりを持たせなかったように思える。こだわらなかったら、もっと厚みが出てきたのではないでしょうか。

大迫：僕はこの人はうまい人なんだけど、広島との対峙がよくわからないというか、何を狙っているんだろうって。動機がみえないから一枚一枚の写真が意味不明に見えてしまいます。ただ、丁寧に撮ってていいんですけどね。

鳥原：子供の頃から、広島、長崎とかいろいろな問題を教えられてるけど、どれだけ自分の身に寄せて考えられるか、考えなくてはいけない。時代の変わり目にきていると思います。

司会：今回は、日本の歴史や過去の事件、民族の問題、現代を象徴する風景などをテーマにした作品が選ばれました。また昨年同様に、それぞれの出品者と選考員が対談して、さらに作品の意図するところを深く追っていきたいと思います。今日はありがとうございました。